

ほんばこ



ながつき もみじづき ほぎつき
9月(長月 紅葉月 秋月)

※二十四節気※

はくろ
白露 8日 大気が冷えてきて露を結ぶ頃です。朝夕の涼しさがくっきりと際立ってきます。

しゅうぶん
秋分 23日 春分と同じく昼夜の長さが同じになる日です。これから次第に日が短くなり、秋が深まっていきます。

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2023

先月、8月15日に78回目の終戦記念日を迎えました。年月が経つにつれて遠く感じるようになってしまう日本の戦争を本から学ぶことも大切だと思い、私はこの本を薦めさせていただきます。

超国家主義の論理と心理 著 丸山眞男 岩波文庫

この本は戦前の日本の超国家主義という体制を、戦争を体験した著者が分析したものです。日本はどうして太平洋戦争のような過ちをしてしまったのか？そこには、「八紘為宇（はっこういう）」や「天業恢弘（てんぎょうかいこう）」といった幼稚なスローガンを掲げつつも、はっきりと形にされていない強力な政治的な考え方がありました。このような考え方は今の日本社会にも根強く残っており、日本とはどんな国なのか、軍国主義と敗戦の歴史から深く考えさせられます。著者の丸山眞男さんも現在の「公共」の資料に載っており、歴史的に有名な人です。本の内容が理解できたとき社会の見え方がきっとかわると思うのでおすすめです。

(2年 男子)

新しく追加された本を紹介

☆今年の夏に新しく追加された本を紹介します。この機会にぜひ手に取ってみてください。

書名	著者名	出版社
暇と退屈の倫理学	國分功一郎	新潮社
「利他」とは何か	伊藤亜紗 編	集英社
やりたいことが見つからない君へ	坪田信貴	小学館
ウクライナから来た少女 ブラータ、16歳の日記	ズラータ・イヴァシコワ	世界文化社
スポーツをしない子どもたち	田中充, 森田景史	扶桑社
スポーツする人の栄養・食事学	樋口 満	集英社
本を守ろうとする猫の話	夏川草介	小学館
臨床の砦	夏川草介	小学館
さがしもの	角田光代	新潮社
空をこえて七星のかなた	加納朋子	集英社
この本を盗む者は	深緑野分	KADOKAWA
世界でいちばん透きとおった物語	杉井 光	新潮社
六人の嘘つきな大学生	浅倉秋成	KADOKAWA
i n v e r t 城塚翡翠倒叙集	相沢沙呼	講談社
この夏の星を見る	辻村深月	KADOKAWA

薦めてみる本 イェンセン『王の没落』 岩波文庫（長島要一訳）

1 イェンセン 1873～1950 Johannes V.Jensen

デンマークの作家。ノーベル文学賞（1944年）。代表作に『デンマーク人』『アイナー・エルケア』『ヒンマーランの人々』『王の没落』『森』『ドラ夫人』『車輪』『長い旅』のほかエッセイ集『神話』など。20世紀初頭に日本を訪れ「フジヤマ」というエッセイも書いている。（岩波文庫の解説を参考にした。）

2 『王の没落』 KONGENS FALD

1901～1902年発表。デンマークにおける20世紀最高の小説と言われる。舞台は16世紀の北欧（デンマーク、スウェーデン）。

（1）時代背景

デンマーク王クリスチャン1世には子が二人いた。ハンス王とフレデリック（南ユウン公爵）だ。ハンス王はノルウェー王、スウェーデン王を兼ねカルマル同盟を再編した。が反乱が起こりスウェーデンが同盟から離脱。その子クリスチャン2世（1513～1523デンマーク王）は西はグリーンランドから東はフィンランドに到る大海洋帝国を構想し、スウェーデンに侵攻。スウェーデンでは独立派の摂政ステン・ストゥールと同盟派の大司教グスタフ・トロレが抗争していた。クリスチャン2世はストックホルムで独立派の大粛清（1520年ストックホルムの血浴）を行い、スウェーデン王を兼ねる。ここにカルマル同盟は復活。しかし、反発を買う。デンマークでは叔父のフレデリック1世に王位を奪われ、クリスチャン2世はオランダに亡命。スウェーデンでは貴族グスタフ・ヴァーサが反乱しスウェーデン王グスタフ1世となりカルマル同盟から離脱。クリスチャン2世はセナボー城に終身幽閉となる。1534～36年デンマークの農民が貴族に反乱を起すが鎮圧される。1540年スイスの医師・錬金術師のパラケルススがホムンクルスを作れると主張。1543年コペルニクスが地動説を主張。これらが背景になっている。（岩波文庫の解説を参照した。）

（2）内容 どこまで史実でどこからが虚構かは分からない。

文字通り「王の没落」の時代を扱っているが、第一の主人公はミッケル・チョイアセンという男だ。彼は田舎の鍛冶屋の息子だが学生として首都コペンハーゲンに出て、各国で傭兵を経験し、最後は国王クリスチャン2世の側仕えの騎士となる。クリスチャン2世が没落し幽閉されたとき側にはミッケルがいた。ミッケルは恐らく王の陰画のような存在だ。ミッケルはいつも満たされず不幸だ。劣等感と憎しみをバネにして生きている。ミッケルの奮闘と絶望を通して、クリスチャン2世の時代の栄光と悲劇を描いたのだろうか。全編に美しくも陰鬱な北欧の自然が描き込まれている。死後の世界や北欧の女神、錬金術師も出てくる。主な登場人物を挙げてみよう。

ミッケル：田舎出身の学生。のち傭兵、王の騎士。

オッテ・イヴァンセン：ミッケルと同郷の貴族。ミッケルの恋敵。二人の因縁は深い。

スサンナ：ミッケルが恋した女性。ユダヤ人メンデル・スパイアの娘。

アネ・メッテ：ミッケルの幼なじみで、オッテの許嫁。

（以下ネタバレを含む）

アクセル：騎士。実はスサンナとオッテの子。

インゲ：実はミッケルとアネ・メッテの娘。

イーデ：耳と声の不自由な少女。実はインゲとアクセルの娘。

ヤコブ：旅のバイオリン弾き。イーデを育てる。

カルロス：ホムンクルス。実はクリスチャン2世の子。天才的頭脳を持つが…

ザカリアス：謎の医者。おそらく錬金術師。ホムンクルスとしてカルロスを育てる。 （安井）